戦争から学んで平和につなげる

読谷小学校　六年　二組　大嶺　沙綾

沖縄の六月は、いれいの日があり、特に戦争のことを考えさせられる月です。これは、残酷で悲惨で、悲しいものである戦争を忘れないためなのではないかと、この作文を作成していて、強く感じました。

一九四五年四月一日に、アメリカ軍が上陸しました。この日から約三ケ月にわたり、日本で唯一の地上戦（沖縄戦）が行われました。

戦時中は、十代の子どもなど、多くの住民が兵士や看護師の代わりをさせられました。他の住民は、ガマなどにかくれて生活を送っていました。しかし、ガマの近くにアメリカ軍が迫り、集団自決が起きたり、赤ちゃんの泣き声でバレるからなどの理由で、日本兵に上る幼児処分が起こったそうです。それだけではなく、味方であるはずの日本兵にガマを追い出され、食料をとられたり、独特な方言で話すためスパイだと思われて攻撃されたりし

KYOKUTO 20×20

ていたのです。

沖縄戦は南の方で少しずつ悪化し、本島南部にある喜屋武半島では、一ヶ月六八〇万発の「鉄の暴風」が吹きあれたといわれ、住民一人あたり五〇発ほどうちこまれたといわれています。この沖縄戦では、アメリカ軍二万二千五百二十万人、日本軍は約十五倍の十八万八千百三十六人ほどが亡くなっており、そのうちの十二万二千人以上沖縄県民なのだそうです。

私は、戦争で亡くなった人にもくとうをさげるいれいの日は、どのようにできたのか気になり、調べることにしました。六月二三日のいれいの日は、一九四五年六月二三日に、牛島満司令官と、長勇参謀長が自決し、組織的な戦闘が終結したため、いれいの日に定められたそうです。牛島満司令官は、自決する前に「最後迄（まで）敢闘（かんとう）し悠久（ゆうきゅう）の大義（たいぎ）に生くべし」つまり、「降伏するのではなく、死ぬま

で戦いつづけろ」と、命令を出したと言われています。また、日本軍が完全に負けを認めたのは九月七日で、六月二三日以降に亡くなった人もたくさんいます。

今でも、沖縄戦のつめあとが残っており、亡くなった方々のい骨や、アメリカ軍基地、また、戦争を体験した方々の心にも残っているでしょう。

私は、環境は人に大きなえいきょうをもたらすものだと思います。戦争という最悪な環境の中で、教育や生活が悪い方に変わり、人も悪い方へと変わってしまいました。誰かが、「戦争は、人が人じゃなくなる」と言っていた訳が身に染みてわかりました。これからは、「戦争」という言葉の重みを理解して、世界中のみんなが幸せになれるよう、小さなことから少しずつ、人に優しくする努力を積んでいきたいです。

KYOKUTO 20×20